



学習指導案には、略案と細案がありますよね。その違いについて詳しく教えてください。



略案は、授業の大まかな流れを押さえる設計図です。

細案は、授業全体が構造化されている緻密な設計図です。

学習指導案の略案・細案共に、基本的には決まった様式はありません。

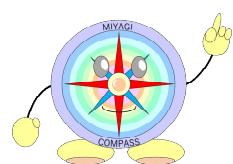
ただし、各市町村や各学校などで様式が決められていたり、初任者研修等で示されたりする場合があるので、参考にしてみるとよいですよ。

○学習指導案の形式の違い

	特徴	活用場面（例）
略案	<ul style="list-style-type: none"> 細案の「本時の計画」の項目（本時のねらい、本時の指導過程など）のみ明記している。 T I（授業を中心に考える教師）が基本的に作成し、T・T間で授業の共通理解を図ることができる。 A4版1枚程度でまとめることが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時の授業の構成を考えるとき。 本時の指導記録を累積するとき。 本時の授業改善等に役立てるとき。 授業研究会などで、授業者の意図を分かりやすく示すとき。 参観日等で、保護者に授業を見てもらうとき。
細案	<ul style="list-style-type: none"> 単元（題材）名、単元（題材）設定の理由、単元（題材）の目標、単元（題材）の指導計画、評価規準、本時の指導など、一単元全ての項目について、詳細に明記している。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒や単元（題材）、授業の捉え方、考え方をまとめ、授業研究会等で授業を提供するとき。 単元（題材）全体の授業改善等に役立てるとき。 校内研究や研修会、学校訪問指導などで関係者から授業に対する助言を得るとき。

略案づくりのポイントは、児童生徒の実態を的確に把握し、授業のねらいを明確にすることです。「できるようになって欲しいことは？」「どうすれば、みんなで楽しく活動できるかな？」というような、児童生徒への思いやアイデアを形にしましょう。

細案を書くと、目の前にいる児童生徒のことをじっくり丁寧に考えながら授業づくりをすることができるので、児童生徒のより良い成長と教員の専門性向上が期待できます。



日々の授業づくりと同様に学習指導案づくりでも、児童生徒の実態を踏まえることが、大切なポイントなのですね。